

霧島火山脈と大屯火山脈に就て

國 富 信 一

大正十三年十月卅一日沖繩縣下鳩間島附近に海底新火山の爆發ありし事は當時實見者たる大阪商船會社宮古丸船長加納直市氏の報告と共に氣象要覽誌上に概略を記載して置いたのである。然し何分にも爆發地點が海中であつたために新火山の位置は正確に之れを測定する事は不可能であつたが加納船長の報告を總合して考察するに八重山列島西表島の北方より少く東に偏れる沖合なりと思惟せらる。

元來九州、沖繩、臺灣附近の火山配置は大森博士の研究に依れば一列の火山脈を構成するものとして考へられ、其の原因に就て博士は震災豫防調査會報告第八十七號九十六頁に次の如き説明を加へられてある。即ち日本の島弧は日本海方面より島弧に直角若しくは放射狀に外方に向つて凸弧狀をなして居る從つて外方は伸張を向け、内方は壓縮を受ける結果其の境界線たる中央軸は伸張、壓縮何れをも蒙らざる不偏の狀況にあるであらう。而して伸張側面及島弧外方たる太平洋底は大地震發生區域に屬し、壓縮面たる内方は火山地域となるであらうと云ふ。尙博士は其の例として阿蘇山、霧島山、櫻島、開聞岳、口之永良部島、中之島、諏訪之瀬島、鳥島等の諸火山は沖繩列島の西北方たる島弧凹面を西南に延長せる如き火山脈を構成して居るに反して其の外方に羅列せる種々島、屋久島、大島、沖繩島は火山質でない

い事を挙げられて居る。

此の如き博士の説に對しては我々少しも異論を挟むものでない。而して今回新に爆發せる鳩間島附近の海底火山も亦此の火山列中に含まる可きものであらう。

只茲に注意すべき事は明治以後に於て只一回の爆發をなしたる臺灣彭佳嶼及び昔時活動をなせしも現在には休止せる長崎縣温泉岳の兩火山が果して九州及沖繩を連結せる火山脈に屬するものなるや否やと云ふ事にある。今試みに水路部の測量に係る沖繩縣下及臺灣附近の海圖を見るに八重山列島を包みて一帯の淺海があり、其の南側は等深線密集して太平洋の深淵に向つて居る。更に又北側は一帯の稍や深き海溝を隔て、支那海に連つて居る。而して彭佳嶼の火山は新火山に對して其の間に如上の海溝帯を隔て、居るのである。

尙興味ある事は彭佳嶼附近の淺海が沖繩列島に並行して遠く九州北端に延長せる事實である。如斯き事は實に霧島火山脈の末端が如何なる方面に延長せるかを定むる手掛りで無くては無らない。更に此の種の材料としては臺灣の東方沖にある火燒島火山及び高雄州なる鯉魚山の泥火山、臺北附近なる大屯火山等の位置及び長崎縣の温泉岳の孤立した様な地位が考察の中に置かれなくては無らない。

今迄の説に依ると温泉岳は或は霧島火山脈の延長と云ひ或は阿蘇山、九重山、鶴見岳等を連ぬる別系の火山脈とも稱せられて居るが何れにしても二百年来休止せる此の火山の活動週期其他の性質が判然せ

ぬため之れを確かむる由も無かつたのである。

又一方霧島火山脈の末端は沖繩縣鳥島火山より彭佳嶼、大屯等の火山へ連なるものなるやの觀を抱か
しめて居つた事も事實である。然るに今回の鳩間島附近海底火山の爆發は之等の火山の系統に對して確
然たる差別を與へたかの如き重要な意味を有するのではあるまいか。

即ち今假りに溫泉岳と彭佳嶼の兩火山を結ぶ曲線を略沖繩列島に並行に引いたものとすれば此の線と
鶴見岳、九重山、阿蘇山、霧島山、櫻島、開聞岳、硫黃岳、口之永良部島、上之瀬島、中之島、諏訪の
瀬島、惡石島、寶島、橫當島等の諸火山を連ねて遙かに鳩間島の新海底火山、火燒島に至る線との間に
は一帶の深海溝が之れを隔て、居る所から考へると之等兩火山帯は別系のものゝ互に並行して日本島弧
の内側を走つて居るものではあるまいかと考へられる。

勿論如上の如きも單に一説に止まるもので極めて雜駁な議論であるから決して一概に之れを斷定し得
るもので無く單に大森博士の云はるゝ同一火山系中に於ける火山の活動が週期的である事が眞ならば其
の方面に於て一考すべき價值もあらうかと考へたまでの事である。

此の報文起草中築地技師は左の如き有益なる事實を參考として御教示下された。其れに依ると九州の
五島の多くは火山質であつて其の中には火山彈が存在し更に五島の南西二三十里に當る男島女島も亦火
山質であるとの事である。之れより察するも溫泉岳の火山脈は五島を経て遠く西南に連なる事を想像し

得るのである。更に元臺北測候所長近藤久次郎氏よりも臺灣の火山に關し種々有益なる御助言を忝ふしたので氏の談に依れば氏は大屯山附近にて火山彈を發見せられたとの事で大屯山が火山である事は明白であるが又澎湖島も火山質であり、又臺灣宜蘭の沖なる龜山島も火山であるとの事である。之等の事實より按ずるに大屯火山脈は龜山大屯山澎湖島を連ねて溫泉岳へ連なると見るのが至當であらう。茲に兩氏の御助言を深謝する次第である。

タイムシゲナルに就て

會 我 義 德

地震観測上時刻を正確に保つ事の必要なるは、今更云ふ迄もない事である、之が爲には從來有線電信による午報機關はあるが、電線の故障の場合は全々不満足の結果となるし少し遠隔の土地になると中繼盤の爲、正確なる時よりも可なり遅れ勝となる不便があるが、そこへ行くと近來著しく發達しつつある無線電信による時報の迅速にして正確なるに若くものはない、實に無線電信の時報は電氣時計と正午砲(ドン)とを兼ねた理想的のもので、之を一種の無線的ドンと云ふ事が出来る。私は常に思つて居る、普通のドンは通達距離僅少なものであるが、無線のドンは全世界に響くのである、されば耳の代に之を検出しめ得る設備さへ施したならば、内地はるか全世界の主なるタイムが居ながらにして聽取出來るの